

# 協働で作る授業の実践

## ー学びの共同体としてのクラスー

牧 かずみ

医学部

内線 5130 maki@sch.md.shinshu-u.ac.jp

### 要 旨

本稿は筆者が担当する共通教育1年次生に対する英語授業、J英語Lの実践報告である。学習者が中心になって積極的に参加する学びの過程を大切にしつつ、修得目的とされるリスニング力をつけるために、クラス内では、1) ペアー、グループなどの協働作業を取り入れ、2) 出来る限りインプットは英語でおこなうこととした。また、継続的学習の習慣付けに、3) 毎回復習の単語テストをおこなった。クラス外の課題としても、グループで協力してシャドーイング練習をし、4) 実際の発表をもって課題完了とした。

学期末のアンケート調査の中で、これらの取り組みに対する学生からの感想を聞いたので、その結果を報告し、助言と建設的アイデアをいただきたい。

### キーワード

協働作業 学習者中心 教室言語 クラス外課題 過程重視

本稿は筆者が担当する共通教育での英語授業の実践報告である。

筆者は本年度前期より共通教育1年次生の英語の授業を担当することとなった。ほとんど準備期間のない状況での担当となったが、外国語科目管理部によるガイドラインとテキスト例の紹介があったために、基本的コンセプトが理解でき、あまり慌てることなく準備できたことは極めて有難かった。

### 1. 実践方式

コースはスキル別の設定になっていたが、どのコースの担当になろうと、個人的には以下の4点を実践したいと考えていた。

1. ペアー、グループによる作業活動を出来るだけ取り入れ、学習者中心の方向性を目指す。
2. 授業は出来る限り英語で進める。
3. シャドーイングを導入する。
4. 単語テストを毎回行う。

これらを取り入れるのは以下のような理由による。

1. ペアー、グループによる作業活動：いわゆる Task-Based, Learner-Centered Approach と言われる教え方での活動である。AET など Native English-speaker の教師に

よる授業を経験するに従い、受身的な学習スタイルに慣れて来た日本人学生もそれを由とはせず、自己表現ができるようになる必要があると感じている (Miller, '95)。しかし同時に、積極的参画を期待されることは学習者にとってプレッシャーでもある。そのプレッシャーを押しえてくれるのがグループでの助け合いである。グループやペア活動を取り入れるなどした、学習者参加型の授業形式をより好ましく捉え、高い満足度や有効性を示す場合は多い (Shimizu, '99) (川出, '99)。筆者の調査でも同様の結果を得ている (牧, '01, '03)。また、教師中心の授業に比べ、グループ活動ではより多くの発話があり、意味交渉の機会が増え、活発なコミュニケーションが行われた (小池, '94) との報告もされており、授業が受動的にならない手立てとして有効であると考えている。

2. 英語のインプット量を最大限に：母語環境にしながら外国語を学ぶ学生達に出来る限りのインプットは欠かせない。その意味で限られた授業時間では使用言語を可能な限り英語とする必要がある。「可能なかぎり」の意味するところは、以下の2点において母語を使用するからである。すなわち、母語を使ったほうが言葉の概念理解を促進できる時は日本語を用いる。直接法は、「外国語は外国語で理解させること」(Richards, '02) (天満, '72) と捉えられるところから、いっさい学習者の母語は使わないと考えられている。しかし、天満 ('72) も指摘するように、「この教授法からもっとも利益を受けたのは、帰納力のすぐれた、知能の高い生徒」ということになった。「直接」の意味するところは「言葉とその概念を直接結びつける」ことであり、筆者はその限りにおいて、特に成人の学習者に対して、母語使用は許容できるという立場を取っている。2点目は、学生との距離を縮めて緊張感をほぐす時である。同郷の者同士が標準語でしゃべっている時に感じる距離感は、共通の方言に切り変えることによって一挙に近さを感じるのと同様である。経験則ではあるが、また、コードスイッチの問題はどうなるのかという疑問も残るが、学習者が母語環境で外国語を学ぶ成人の場合は特に、日本語を有効に活用する必要があると思われる。

英語のインプットとして Non-native English speaker の教師の英語を聞かせることについての躊躇を感じる方もあるかも知れない。しかし、言葉をコミュニケーションの道具として学ぶ場合は、世界で現実にしゃべられている英語の75%が Non-native English であることを考えてみればよいのではないだろうか。

3. シャドーイング：言葉が表すとおり、聞こえてくる音をそのまま真似て、影 Shadow のように追いかけていく方法で、同時通訳者の訓練法の一つとして知られている。流れてくる音を聞きとることそのままそっくり真似ることを同時平行でやるには、かなりの集中力を要求されるだけでなく、発音、抑揚、イントネーション、スピードのすべてがトータルのにそっくり真似られなければ、シャドーイングは不可能である。従って、自ずと学習者自身のスピーチをよりネイティブに近いものに変えてゆくのに効果的であると考え。自分の発音、抑揚、イントネーションがネイティブのそれから離脱している場合、音声言語は理解できず、文字化されてはじめてわかる、といったことはよくある。そのことは、他人が発した音より、自らが発した音のほうが定着することを表していると考え。口を動かすには運動機能を使っている。そうして発した音は空気伝達され、聴覚から入ってくるだけでなく、骨格を振動させて骨伝導により、やはり聴覚を通してインプットされる。つまり、自らが発した刺激は、音声として聴覚を介してもインプットされるため、より強い刺激が入ると考えら

れる。シャドーイングは口を動かし、真似ることでスピーキングをよりネイティブに近づけるだけでなく、リスニング力向上に役立つものと考えている。

4. 単語テスト：総合的語学力の必須要素の一つが語彙力であることに反対する者はいないだろう。語彙力を伸ばすためにはまずインプットを必要とする。インプットは単一の語としてではなく、脈略の中で紹介されてはじめて使い方も理解できる。川島（'02）は、大脳生理の立場から、特に音声言語システムと文字言語システムの両方を用いることで脳の活性化が進むことを報告している。何度も言ってみる、書いてみる、書きながら言ってみるといった複数の感覚を用いた繰り返しから定着が進む。毎回の語彙テストは、チェックを受けることによって、学習者自身自分の意味理解が正しいかどうかを確認できると同時に、クラス外学習の習慣付けと動機付けの役割を果たすものとする。

## II. 担当コース

担当となったのはJ英語Lと言われるコース、2クラスであった。Listening Skillを養成するコースである。指導者用ガイドの授業内容と目標には以下のように記述されている。

Listening力およびVocabulary力を養成することに主眼をおきます。英語の音声の基礎と音変化からはじめて、標準的な英語の聴き取りを学びます。具体的目標は、日本語を介さず英語を英語のまま聴き取ることができるようになることです。また、毎回ボキャブラリー（語彙）の小試験をおこないます。

これを読むかぎりでは、スキル別設定の意味するところは「Lはリスニング活動をするためのクラス」という意味ではなく、「修得目標として焦点を当てたいスキルが聴解力」ということで、目標を達成するために必要な、あらゆる活動をおこなうことを妨げるものではないと理解できた。そして、私自身のアプローチが指針から外れているとは思われなかったので、計画を実行に移した。ただし、入学したばかりの1年生の前期であり、互いに顔も名前も知らない、情報もほとんど持ち合わせていない同士であることに配慮して、応分の教師コントロールは必要と考えた。

### A. テキスト

使用したテキストは2クラスとも、以下のとおりである。

1. TOEFL Short Listening Course, by Barbara Wells, 森戸由久, 成美堂, 1995
2. A New Approach to Natural English, by Sanzo Yahagi, et al, 開文社, 2002

1. TOEFL Short Listening Course：このテキストはTOEFLと銘打ってあるが、問題形式そのものに沿った構成ではなく、TOEFLでカバーされる基本項目を学習することでリスニングの基礎力をつけることを目的としている。内容量、語彙量等を考えても、TOEFL問題そのものに当たるにはレベルがかけ離れ過ぎ、効果は期待出来ないと考えての選択である。目次から各課の内容を一部紹介すると、以下のようになっている。

- Lesson 1) 単数と複数を聞き分ける
- Lesson 6) 同音異義語を聞き分ける
- Lesson 10) Idioms 比喩表現に慣れる

Lesson 15) Situations 大学キャンパス

Lesson 17) Lectures アメリカの人種問題

2. A New Approach to Natural English: この教材にはシャドーイング用の短い読み物(ほぼ60~70ワードのもの)とそれに先駆けた大切なフレーズが、連結、同化、脱落、弱化などのナチュラルな英語の特徴を含んだ発音記号付きで記載され、練習できるようになっている。基本的にはクラス外のシャドーイング練習用とし、授業時間内には、各課本文の内容理解を確認すること、フレーズ練習に用いた。

担当の2クラスは文系(以下クラスA)、理系(以下クラスB)と学部が異なる。それに関わらず同じテキストを選択したのには、共通教育での初体験の授業が私にとって少しでも心地よく自信を持って提供できるようにしたいと考えたことも事実であるが、対象が1年次生の初学期であり、専門の違いに関わらず、教養として幅広い内容に触れる必要はあると考えたからである。又学習者中心のアプローチを取ることで、自ずと彼らの関心ある分野を盛り込むことが出来、同じテキストであっても内容に変化を持たせることは可能であると考えた。どちらのテキストにもCD, Audio Tape(教師用を複製させた)があり、クラス外で毎日最低20分英語に触れる事が上達の必須要素であることを、初回の授業日、シラバスの解説と共に告げた。

## B. グループ分けと授業内容

A, Bどちらのクラスもそれぞれ学席番号順に4名ずつの小グループに分けた。あらゆるグループ活動はこれを最小単位とし、相互に助け合いながら作業をおこなわせるため、同じグループのメンバーは常に近くに席取るよう指導した。同じ学科とは言え、常に同じ講義を受講するとは限らない。1年生の初学期でもあり、1人でも2人でも親しい仲間を作ることが出来るように考えたためである。

毎回の授業の形態、クラス外課題、得点配分は以下のとおりである。

### 毎回の授業形態:

- a. 復習目的の単語テスト: 単語は、発音記号を含む、前課で扱った内容の中から選んだ。口頭で定義を与えて、その意味の単語を書かせる場合(例: This word means "to express feelings of dislike, dissatisfaction, etc.")や、目標の表現を文例と共に与えて、その文例にあった訳語を書かせる場合(例: "work" as in "The artist left a lot of works.")など形式は一定ではなかったが、語彙の概念的理解を重視した。指示文、定義文等は、語彙の定義能力を向上させる前提としてのInputと英語の聞き取り練習を意図して、すべて英語でおこなった。発音記号のチェックは、提示された記号が含まれる単語を自分で選び、短い文を作らせるものと、ナチュラルに変形させた句や文単位の発音表記 [aɪl kɒmən ɡetʃu] を通常表記 (I'll come and get you) に置き換えさせるものの2種類をおこなった。
- b. 発音記号: すべてを網羅するには時間が限られていたため、Alphabetの文字と異なる発音表記のもののみを対象とした。理解の確認は前述の単語テストの中でおこなった。
- c. Text 1: 単元内容の補助情報はプリントによって補充した。練習問題は答え合わ

せをするのではなく、答えの選択肢から質問の内容をグループで話しあって予想を立てた上で聞かせたり、正答となる鍵はどの言葉であったかなどを話させた。先述のように、学習者に予想、類推を求めるアプローチは帰納力と高い知能を要求する。そのプレッシャーを押さえ、学生達が助け合ってグループとしての解答を探し出すことで、協働の意識を持たせるよう配慮した。学生達から引き出す事が出来なかった不足情報は教師が補い、解説を加えた。TOEFLにおいても文化的な情報を持っているかどうか、予想、類推の大きな助けとなるため、文化に関する情報も提供しよう心がけた。

シャドーイング課題：シャドーイングはクラス外の課題とした。Text 2の中から1課をグループ単位で選択し、その中の短い読み物と課末の会話文を研究室で発表することが課題である。特に会話文は全文 Dictation する必要があり、グループの協力を必要とする。シャドーイング練習し、全員準備が整ったところで、グループごとに研究室にやって来た。全員満点を与えることが目的で、OK が出るまでは繰り返すこととした。

得点配分：毎回の単語テストが40ポイント、期末テストが40ポイント、シャドーイング課題が20ポイントの配分とした。

### III. 学生からの感想

このような形で本年度前期コースは修了した。現在信州大学では学期末に学生によるコース評価が全学レベルで実施されている。その調査表には選択肢付き質問に加え、改善点と全般的コメントを記入すべき自由記述部分がある。上述のような筆者の取り組みに対する学生達の反応を知り、今後の方向性への示唆とするために、それらについての感想、改善点を自由記述部分に具体的にコメントしてくれるよう求めた。以下がそのまとめである。

1. グループ作業 (表1, 表5)：クラスAは81%が回答し、Bでは69%の回答率であった。内訳はAでは73%が肯定的に捉えたが、27%がうまく機能しなかったと回答した。作業に変化がほしいというコメントも見られた。一方、Bではあまり回答率は高くないが、その86%がグループ作業をかなり肯定的に捉えた回答となった。
2. 英語使用 (表2, 表5)：A, Bそれぞれ76%, 66%と、共に回答率はやや低めであった。コメント内容は様々であったが、「適度」や「もっと使って」という肯定的な内容はどちらも80%を越えていた。「あまり使わない」と感じた者がクラスBに1名いた。
3. シャドーイング (表3, 表5)：Aでは78%, Bでは75%と高い回答率であった。内容的には、クラスAでは93%が、クラスBでは83%が「いい」「やりがいがある」「スラスラ発音できるようになった」と高いプラスの評価をしている。中には「まだ足りない。中途半端では効果がないのでは」とコメントする者もいた。ただ、「人によって合う、合わないがある」「やめてほしい」といった意見も若干見られた。
4. 単語テストのやり方 (表4, 表5)：クラスAは73%, クラスBは78%の回答率であった。Aでは最も回答率が低い項目であったが、簡単すぎると感じる者が多く、「このやり方でいい」とする者は58%であった。また「範囲が曖昧」という者も31%いた。一

表1. グループ作業

	人文	30	理学	22
よい。工夫、変化を希望	22	73%	19	86%
うまく機能しなかった。やりにくかった。	8	27%	1	5%
その他	0	0%	2	9%

表3. シャドーイング

	人文	29	理学	24
いい。やりがいがある	27	93%	20	83%
人によって合う合わない、無理	2	7%	2	8%
その他	0	0%	2	8%

表5. 項目別回答率

	人文	37	理学	32
1. グループ作業	30	81%	22	69%
2. 英語使用	28	76%	21	66%
3. シャドーイング	29	78%	24	75%
4. 単語テストのやり方	27	73%	25	78%

表2. 英語使用

	人文	28	理学	21
適度	18	64%	12	57%
もっと使って	5	18%	5	24%
つらい、日本語も	5	18%	3	14%
あまり使わない	0	0%	1	5%

表4. 単語テストのやり方

	人文	26	理学	25
よい	15	58%	14	56%
範囲が曖昧	8	31%	1	4%
簡単すぎる	3	12%	1	4%
難しい、減らして	0	0%	5	20%
その他	0	0%	4	16%

方Bでは4項目の中でコメント数が最も多い。56%が「これでよい」としているが、20%は「難しい。減らしてほしい」と感じており、簡単だというのは1名のみだった。

## B. 分析と改善点

いずれの項目もほぼ肯定的に評価されたと判断してよいと思うが、それぞれに改善点も指摘された。そして、それはクラスによって異なることも明らかになった。

**グループ分け** (表1) はどちらのクラスも単に学籍順におこなった。そして両クラス共、グループ活動自体には概ね肯定的であった。回答数が多いものほどインパクトが高かったと判断すれば、クラスAはグループ作業に対して是であれ非であれインパクトを感じた者が多かったと推察するが、クラスAはクラスBに較べてうまく機能しないグループも多かった。それは、文化系のクラスAでは、他の講義で一緒になることもまれらしく、クラスとしての粘着度が高くないことが起因したのではないかとと思われる。一方、BはAに較べて専門の均一性が高く、他にも同じ授業を受講することが多い。又、春、秋一斉旅行も行なっている。従って親密度も高く、ラポアーを作りやすい状況があったことが要因と考えられる。また、将来的には専門分野においてもグループ活動がおこなわれ、協働作業への抵抗感はうすかった可能性がある。また、クラスAでは活動の種類にバラエティを求めるコメントも見られ、Bよりグループ作業を減らし、作業内容には変化を加える必要があると思われる。クラスBでは学生の自由裁量による協働活動を引き続き実施してよいと考える。

**英語使用** (表2) については、どちらのクラスにも「つらい」と感じている者が15%前後

存在しているものの、「もっと使ってほしい」者も20%前後それぞれ存在していた。そしてBには「あまり使わない」と感じている者もいたことを考え合わせると、いままで以上に英語の使用を増やすべきかも知れない。やや低めの回答率からは、どちらの言語であってほしいという事前の期待感あまり持っていなかったことが推察される。ただ、初回に「基本は英語」であると明言したことが「全部英語」と解釈された可能性もあり、その意味では意図の説明も必要と思われる。

**シャドーイング** (表3) は、ずばり「シャドーイングを知った」「新鮮」「かなり効果的」「リズムが少しづつかめた」「難しいが伸びると思う」といったコメントからもわかるように、クラスAでもクラスBでもプラスのインパクトが強かったことが想像できる。題材の長さが60ワードくらいと短いものであったために物足りなさを感じる者すらいた。「これではまだ不十分。中途半端では効果がないのでは」とコメントする者もあり、「やめてほしい」と言う者は1名のみであった。また、シャドーイングもグループ作業としたが、それはシャドーイングがほとんどの学生にとって初めての体験であろうと思われたことに加えて、課題には課末のスキプトの全くない会話文をすべて Dictation する部分も含まれていたことで、シャドーイングまでの準備段階でも仲間同士の援助が必要と考えたためである。やり方もわかった次回は、個人でもグループでも可として継続することとした。

**単語テスト** (表4) については、どちらのクラスでも60%弱は「このやり方でよい」としており、定義による提示、英語での指示等は概ね継続してよいと思われる。クラスBからは様々なコメントが見られた。中には「点数配分をもっと増やしてほしい」という回答や「難しい」以前に「減らしてほしい」といったコメントもいくつか見られ、毎回の単語テストをかなり負担に感じていた者がAに較べて多かったことが推察される。一方Aからは「簡単すぎる」というコメントもあり、レベルや分野に合わせた単語の選択という点で配慮に欠けていたかも知れない。「先週のクラスで扱ったものが範囲」では「範囲が今一曖昧的が絞れない」という反応は、恐らく高校までの単語テストのやり方を反映しているのではないかとと思われる。「減らしてほしい」という意見は別にしても、Reading となる後期的を絞った上で、単語テストのために準備したことがその日の Reading に生かされる、予習型にすることで、クラスAの「簡単」「復習なので気が楽」という者達とクラスBの「難しい」と感じる層への対応策としたい。

毎回単語テストを実施し、翌週にはコメントをつけて返すことで、開始前には思いつかなかった利点があった。それは、40人定員という大クラスでは難しい、個々の学生とのコミュニケーションをテストシートの余白で取ることである。点数を記入するだけでなく、何かしらのコメントをつけて戻すことでこちらの気持ちは伝わる。一方、学生も「今日はやることを間違えた」等返答する者もあり、コミュニケーションツールとしても有効活用が出来ている。

その他文化情報や補助プリントに対して「文化背景の話がおもしろい」「補助プリント続けて下さい」といったポジティブな意見が多く見られ、これらも継続してよいと考える。

#### 良かった点

楽しい、わかりやすい

#### その他の改善点

学習習慣付けへのアドバイスほしい

やる気が出た	AudioTape, デッキ持ってない人もいる
やさしい, 丁寧	出席はもっと早く取るべき
プリントよい	いっぱい英語を聞きたい
文化背景の話よい	時間どおりに終わって
Native の発音が違うことを知った	聞き取りもっと欲しかった
目的がはっきりしてよい。	CD にして下さい
英語が身近になった	プリント続けて下さい。
Shadowing を知った	

#### IV. 後期の取り組み (継続中)

後期の担当コースは Reading である。Reading はそのプロセスを大切にすることを心がけながら授業を進めている。外国語教授法は様々に変遷してきたが、理論的には学習者中心へ移ったことで、受信的活動と思われていたリスニング、リーディングもスキーマを活用して、推論を立て、確認するというアクティブな活動であるという研究が進んできた(小池, '94)。その流れの中で、Neil Anderson ('99) も背景知識や既得語彙を活性化することや語彙力を開拓することなどを提唱している。堀部 ('95) が日本人大学生を対象におこなった実験は、「学生達は Top-down 戦略(予想を立てる, 疑問・批判的な読み方をする, 背景知識を活用する, 推量する, 新情報を旧情報と関連付ける)と Bottom-up 戦略(訳す, 日本語でパラフレーズする, 文法知識を活用する, 未知語へ疑問を投げかける)の両方を活用しているものの, 多くの場合 Bottom-up 戦略が中心で, 読解スコアの高い者ほど Top-down 戦略の使用頻度が高い」ことを示していた。そして, これらの戦略の中では, 彼らがすでに持っているはずの「文法知識や背景知識・情報」を効率的に活用していないことも報告している。このような傾向は, 恐らくこれまでの英語教育によって培われた可能性があることを考えれば, 注意深く習慣を変えてゆく必要がある。その意味でも, グループメンバーの援助を受けながら, プロセスに焦点を当てた読解作業をおこなうことが新しい習慣付けに役立つのではないかと思われる。

幸い学生達は前期と同じ2クラスである。今期は, 全くの新生であった先学期に較べれば, 互いへの親近感は強まっているはずであるが, それぞれのクラスの特徴に配慮しつつ, 先の調査結果から見出された改善点を取り込んで, Rapid Reading with TOEIC Vocabulary (成美堂) をテキストに, 授業を進めている。

今学期もシャドーイングに加え, テキストで紹介された各課のテーマを自分達なりに発展させる課題を与えている。どの課をどのように発展させるかは彼らの自由であるが, いずれにしろ若干のリサーチは要求され, 自ずと資料に当たらねばならない。そこで, 読む作業が必要になる。発表はポスター形式でも Power Point を使用しても構わないが, 提示物は英語で作成することとした。End Product に至るまでの過程を, 協働で互いにコミュニケーションしながら体験することが上達に貢献する要素と考えている。毎回の授業の中で筆者自身が提示してきたものから「発展」の意味を掴んでくれていることを期待し, 彼らがテキストで紹介された数々のテーマをどのように発展させるかワクワクしながら待っているところであ



る。

## V. まとめに代えて

今日はいまうまくいったかな、今日は空回りしてしまった等々、毎回毎日が試行錯誤の連続で、学生達には申し訳なく思うことも多々ある。そして、いまでも楽になったという想いはない。それでも学習者が互いにコミュニケーションを取らざるを得ない場面を出来る限り作り出し、彼らが積極的に参加してくれる授業を目指したいと考えている。私のつたない実践を報告し、共有して下さった皆様からの建設的なアイデア、ご助言がいただけることを期待している。

## 参考文献

- Anderson, N. : Exploring Second Language Reading. Newberry House, 1999
- Horibe, H. : An Inquiry into Reading Comprehension Strategies through Think-aloud Protocols. JALT Journal Vol. 17, No. 2, Nov, 180-196, 1995
- Hyland, K. : The Learning Styles of Japanese Students. JALT Journal Vol. 16. No. 1, June, 55-74, 1994
- Miller, T. : Japanese Learners' Reactions to Communicative English Lessons. JALT Journal Vol. 17, No. 1, May, 31-52, 1995
- Richards, J & Schmidt, R. : Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics Third Edition, 159, Longman, 2002
- Shimizu, K. : A Survey of Expectations of and Characteristics Attributed to native-speaker English Teachers and Japanese English Teachers by Japanese University Students. Journal of Intercultural Communication 3. 53-74, 1999
- 川出才紀：効果的な英語教育の要因に関する考察。信州大学教育システム研究開発センター紀要 5, 5-26, 1999
- 川島隆太：読み・書き・計算が子どもの脳を育てる。子どもの未来社, 2002
- 小池生夫監修：SLA SLA 研究会編, 1994
- 牧かずみ：医学生が期待する医学英語教育。信州医誌 Vol. 49, No. 4, 199-206, 2001
- 牧かずみ：ESP for Junior Year Medical Students as Part of Medical Curriculum. 信州大学教育システム研究開発センター紀要 9, 79-88, 2003
- 天満美智子 (訳)：外国語修得のスキルーその教え方, 研究社出版, 1972